



バンカラの記憶

～旧制大高・浪高から阪大へ～

「バンカラ」と聞いて何を連想しますか？

実は、数十年前の豊中キャンパスにも「バンカラ」な若者たちが闊歩していました。

100年程前にできた旧制高等学校では、西洋かぶれで見かけを気取った「ハイカラ」に対し、一見粗放ですが見かけにこだわらず精神性を高める「バンカラ」(蜚カラ)を良しとする学生文化が生まれます。身なりは下駄ばき、黒いマントを羽織った「弊衣破帽」という姿でした。

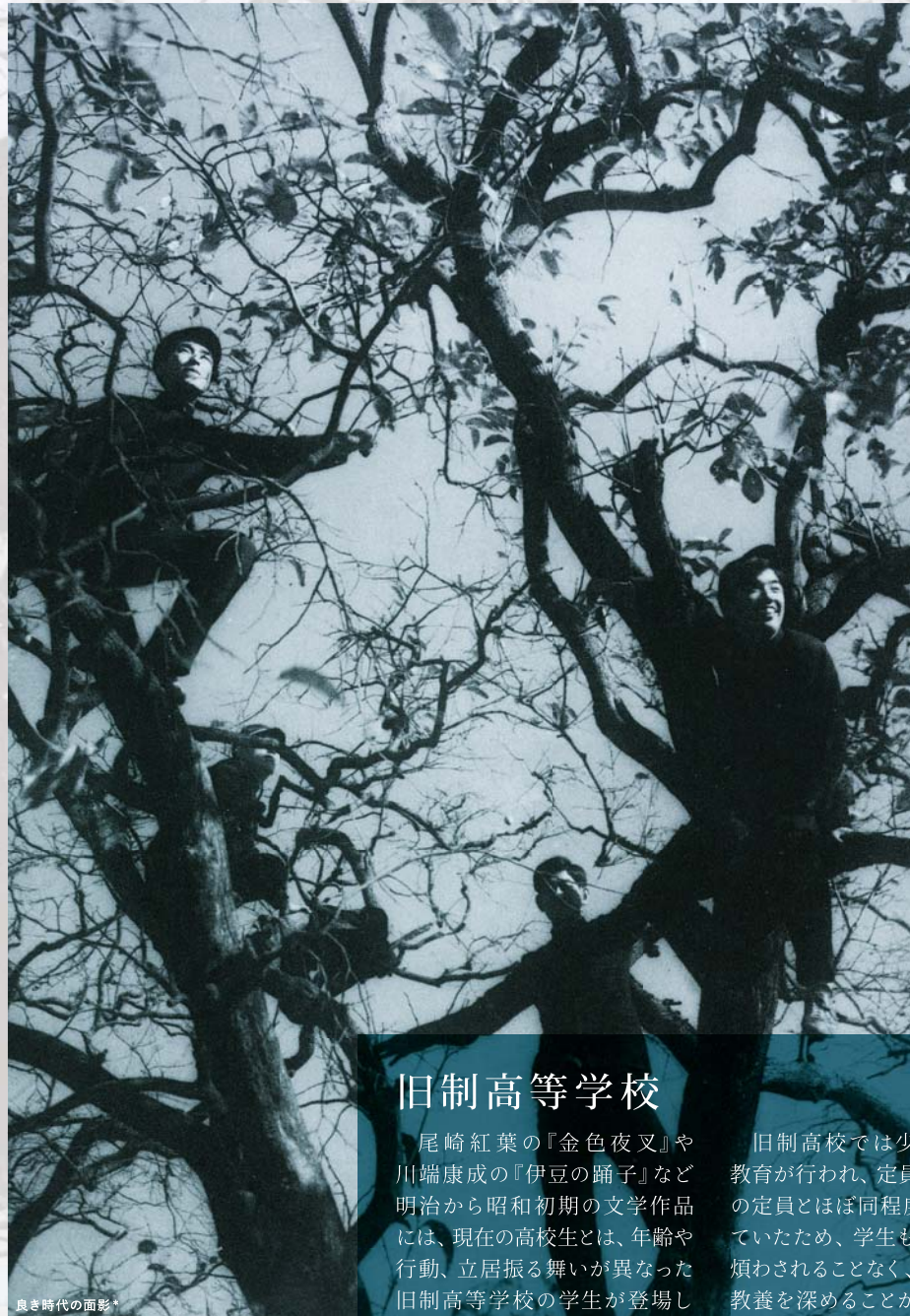
大阪には大阪高等学校と浪速高等学校があり、戦後1950年に大阪大学と統合、一般教養部として総合大学に重要な教養教育の役割を担います。

この両校からは、ノーベル賞受賞者、企業家、作家、声優など実に様々な分野で卒業生が活躍(7ページで卒業生の一部を紹介)。

こうした偉大な先輩方を多数輩出した大阪高等学校と浪速高等学校とは、一体どのような所だったのでしょうか？
2016年7月上旬まで総合学術博物館特別展で展示されていた内容をもとに、当時の若者たちを振り返ってみましょう。

(文／企画部広報課 監修／総合学術博物館 准教授 宮久保 圭祐)

※特集内で用いている資料は『旧制浪速高等学校創立70年記念誌 待兼山 青春の軌跡』* 『写真集 大阪大学の五十年』** から引用しています。



旧制高等学校

尾崎紅葉の『金色夜叉』や川端康成の『伊豆の踊子』など明治から昭和初期の文学作品には、現在の高校生とは、年齢や行動、立居振る舞いが異なった旧制高等学校の学生が登場します。

旧制高等学校は、当時、国のリーダーを養成する教育機関として各地に設立された帝国大学に進む、前段階の高等普通教育機関(実質的に大学予備教育)として整備されました。

旧制高校では少人数による教育が行われ、定員が帝国大学の定員とほぼ同程度に抑えられていたため、学生も受験競争に煩わされることなく、自由に学び、教養を深めることができました。大学で必要になる外国語教育も重視されています。校友会の活動や寄宿寮での共同生活を通じて、学生の自主的な活動が盛んに行われ、各校独特の旧制高校文化を作りだしました。

大阪の高等教育機関

1889(明治22)年、官立の洋学校であった舎密局の流れをくむ第三高等中学校が大阪から京都に移転し、帝国大学も京都に設立されました。そのため大阪は日本を代表する大都市でありながら、高等普通教育の空白地となっていました。しかし大阪には、江戸時代の懷徳堂、適塾に見られるように、官に頼らず民の力で教育をする気風がありました。

明治大正期には実学を学ぶ多くの専門学校が設立され、それは後の大阪帝国大学の母体となったほか、今日の大学へ発展しています。1918(大正7)年の教育制度改革を機に高等学校が拡充され、大阪でも高等教育機関を望む声が高まります。

	1873(明治6)年 大阪府病院教授局(大阪府立医学校、現在の大阪大学医学部) 1880(明治13)年 大阪商業講習所(市立大阪高等商業学校、現在の大阪市立大学) 1886(明治19)年 関西法律学校(現在の関西大学) 1888(明治21)年 大阪府立農学校(浪速大学、現在の大阪府立大学) 1896(明治29)年 大阪工業学校(現在の大阪大学工学部) 1921(大正10)年 大阪外国語学校(大阪外国語大学、現在の大阪大学外国語学部)
--	--

大阪高等学校、浪速高等学校の誕生

大阪府市は40万円で土地を購入、国に寄付し1921(大正10)年に官立の大阪高等学校が設立されました。さらに大阪に高等学校一つでは不足として、更なる新設を計画しました。

大阪府立高等医学校は校長 佐田愛彦の医育統一論の理念の元、帝国大学と

同水準の医学教育を達成するため予科を設立していました。良好な教育環境の実現のために郊外に土地を求め、1919(大正8)年に豊能郡石橋待兼山に府立大阪医科大学(1915に改称)予科を移設したのが大阪大学豊中キャンパスの原点です。

1918(大正7)年の大学令を受け1919(大正8)年には正規の大学、大阪医科大学に昇格しました。そこでは高等学校の卒業生を受け入れられるので、予科の併設は不要となりました。大阪府は予科の資産を活用し1926(大正15)年に大阪府立で7年制の浪速高等学校を設立しました。予科の土地の半分を浪高の校地とし、予科を段階的に縮小、職員も浪高に移動させました。



	大阪高等学校の概要	浪速高等学校の概要
設置	1921(大正10)年11月8日 勅令第432号により設置が決定。文科甲類・乙類、理科甲類・乙類・丙類の5学級	1925(大正14)年11月20日 通常府会におき可決 1926(大正15)年3月19日 文部省告示第154号により認可 尋常科2学級、高等科 文科甲類・乙類、理科甲類・乙類の4学級。
校地／用地	北畠顕家墓所に近い東成郡天王寺村(現在の大阪阿倍野区)の10487坪(約35000㎡)を、大阪府市が40万円で購入して国に寄附した。校地は狭かったが、初代校長・野田義夫の「学校は社会と離隔してはならないからだ」の言葉通り、都市部に校地を求め、現在のあべの筋(旧熊野街道)に接して、鉄筋コンクリート3階建ての校舎を建設する。	豊能郡桜井谷村柴原32ノ1 19500坪(約64500㎡) 「校舎はフリースタイル近世式、鉄骨コンクリートで、ほととぎすの名所なる阪急石橋付近の待兼山に登立し、峽水をたたえた池に臨んでいるだけに高等学校では風景海内一と折紙がついている。」
校章	校章デザインは、大高の絵画講師になる多賀谷健吉の手になる。同僚の教授は、初代校長の野田が常に説いた『速大の抱負・高遠の理想』を「大高の2字に象徴的に組み合わせ、王者の色、紫の七宝の台をローレルでくるんだ校章」と証言する。	校歌に「高等学校『浪速』を名としたいだく徽章も浪こそかけ」と歌われる。浪高生は自らを銀浪児と呼ぶ。
愛称	帝陵 帝塚山、帝塚台の地名による。寮生の同人誌もこの名称。「陵」は丘を意味し、旧制高校の愛称に共通に使われる。	待陵(たいりょう) 待兼山の地名による。同窓会誌の名称も同じ。
対校戦	挑戦表明のあった松江高等学校との対校試合を行うことを生徒大会で決議した。創立翌年の野球部対校試合を皮切りに、庭球、(陸上)競技、水泳の各競技が行われた。	甲南戦 関西の七年生高校である甲南高等学校との試合。
特徴	都会的なスマートな学校と評される。フランス語を第一外国語とする理科丙類は大高と東京高校にしかない。戦後に文科丙類も創設。戦後には女性の学生が1名入学した。	尋常科は小学校の成績優秀者が集まり、「ぼっちゃん学校」といわれることも。旧制高校には珍しい父兄会も活動していた。 初代校長 三浦菊太郎「西の学習院を目指す。」 第二代校長 那須川良 就任式の訓示「文科のLはいわゆるリテラチャーのLではない、リパティ어의Lである。理科のSはサイエンスのSではなくて、ソリダリティのSである。」

※特集内で用いている資料は『旧制浪速高等学校創立70年記念誌 待兼山 青春の軌跡』* 『写真集 大阪大学の五十年』** から引用しています。

旧制高等学校の 終焉と大阪大学 一般教養部の設立

戦後の制度改革で旧制高等学校には、新制大学になるか、新制高校になるかの選択肢がありましたが、多くは新制大学で必要になった一般教養教育を担うため、新制大学に取り込まれ、国立の大阪高等学校は大阪大学への合流が決まりました。

けれども府立であった浪速高等学校では問題は複雑であり、府には専門学校を統合し、府立浪速大学を創設する構想もありました。しかし卒業生の多くが大阪大学に進学していた浪高内では、大阪大学への合流を願って教員、生徒それぞれが決議していました。阪大側でも、今村荒男第5代総長は、文系学部を設立するには浪速高等学校を包括することが必要と考え、大阪府知事赤間文三と交渉の結果、府の浪速高校と国の大阪工業専門学校が、土地・建物・資産を交換することで決着しました。ただし、浪高所有の貴重な書籍類は、新設の浪速大学に必要として府に残され、今も大阪府立大学に保存されています。

1948(昭和23)年に入学した最後の入学生は、入学1年で退校になり新制大学の入学試験を受けることになりました。1950(昭和25)年に大阪高等学校、浪速高等学校は最後の卒業生を送り出します。卒業生総数は5201名と3578名。両校の土地、設備はそれぞれ大阪大学南高、大阪大学北高として引き継がれました。不便さの解消のために、南高は1960(昭和35)年に閉鎖され、跡地には阪南団地が建設。その地には「青春の像」(現在は、大高の森に移設)が建てられました。

大高・浪高に 私たちは 何を思うか？

右表のように大高・浪高の卒業生は、実に多方面で活躍しています。何故これほどまでに活躍している方が多いのか、それは単に優秀な人材が集まったからというだけではないのかもしれませんが。幅広く教養を身に着けた優秀な人材が一時でも寄宿寮等で生活を共にし、深く交流を持ったからなのかもしれません。教育はいつの時代も重要な社会的課題です。先人が苦心されてきたよう

に、これからも時代に即した大阪大学の教育をわたしたちは考えていかなくてはなりません。大阪大学の教養教育の礎になった大高・浪高は、時代は違えど、その課題に一つの答えを示してくれています。



寮の煙突**



石橋の踏切



プール**



記念祭*

多方面で活躍する大高・浪高の卒業生

藤澤 恒夫	作家	大阪高等学校 第2回文科甲類
中山 正善	宗教家／ 天理教第二代真柱	大阪高等学校 第2回文科乙類
安井 琢磨	経済学者	大阪高等学校 第4回文科乙類
釜洞 醇太郎	医学者／ 第9代大阪大学総長	大阪高等学校 第6回理科甲類
福井 謙一	化学者／ ノーベル化学賞受賞	大阪高等学校 第14回理科乙類
早石 修	生化学者	大阪高等学校 第15回理科乙類
金森 順次郎	物理学者／ 第13代大阪大学総長	大阪高等学校 第26回理科1組
豊島 久真男	医学者	大阪高等学校 第26回理科4組
開高 健	作家	大阪高等学校 第27回文科甲類 ※新制大学以降で 1年のみ在籍

満田 久輝	農学者	浪速高等学校 第5回理科乙類
山村 雄一	医学者／ 第11代大阪大学総長	浪速高等学校 第9回理科乙類
森嶋 通夫	経済学者	浪速高等学校 第14回文科乙類
佐治 敬三	サントリー元会長	浪速高等学校 第11回理科乙類
熊谷 信昭	電磁工学／ 第12代大阪大学総長	浪速高等学校 第20回理科2組
岸 昌	元大阪府知事	浪速高等学校 第12回文科乙類
花房 秀三郎	医学者	浪速高等学校 第21回理科3組

この他にも、声優の永井一郎さんや、「マチカネ」の冠名をつけた競走馬の馬主でもあった企業家の細川益男さんなど、分野を問わず多くの卒業生を輩出しています。

現在のキャンパスにみる大高・浪高



青春の像(大阪高等学校生を偲ぶ像。1960年の大阪大学南高閉鎖時に、記念して阪南団地に設置された。現在は、理学研究科正面の大高の森に移設されている。)



「友よ我らぞ光よと」像(浪速高等学校生を偲ぶ像。設立時に「西の学習院を目指す」という初代校長の方針による、ボタンのない海軍式の制服が特徴)



浪速高等学校尋常科の入口のステンドグラス(全学教育実験棟IIに保存されている)



浪高庭園(浪高創立50年を記念し、1975年に築庭された。)



帽子とマントを象った記念歌碑(1960年に旧浪高本館前に完成。浪高庭園内に移設。)

F 大高の森(大高創立50周年記念事業で、1972年に大阪大学に寄贈された。大高創立100周年に掘り出すべくどこかにタイムカプセルが埋められているらしい)

H 大阪大学会館(旧浪高本館。講堂は、当時のアールデコ調を再現。登録文化財)

I 大阪高等学校全寮歌歌碑(1991年に創立70周年記念事業で大高の森の中に設立。)

J 中山池(浪高当時は叫ヶ池とよばれ、水泳部の練習場所にもなっていた)

※特集内で用いている資料は『旧制浪速高等学校創立70周年記念誌 待兼山 青春の軌跡』* 『写真集 大阪大学の五十年』** から引用しています。